

自由変更はどのような方法論であるか

—フッサールにおける本質直観の理論をめぐって

渡辺武士(中央大学)

本発表の目的は、フッサール(Edmund Husserl)(1859 - 1938)現象学における自由変更の理論を主題として、それがどのような問題を孕んでいるのか、また本質を直観するというその本来の役割を十分に果たしえるのか、について検討することである。自由変更とは、フッサール現象学において本質を把握するための方法論のことであり、とりわけ後期フッサールの思索において取り組まれた。自由変更という方法論は、それによって必ず一定の結果が得られるような単なる手続きというものではなく、一種の認識に関する態度といえるものである。ただ、以下で簡単にふれるように、自由変更の理論は様々な問題をはらみ、十分に練り上げられたものであるとはいえない面もある。それでも、自由変更が「本質を認識する」ということを説明するためにフッサールが構想した理論ならば、それを仔細に検討することで、後期フッサールが本質、さらには自身の現象学についてどのように考えていたかを理解する手がかりとなるはずである。本発表は、『経験と判断』などに基づいて、自由変更という方法論について考察することで、後期フッサールの思索に光を当てることを目指す。

周知のようにフッサール現象学は現象学的還元の方法に基づいて、超越論的主観性による世界の構成にまなざしを向ける。フッサールの現象学では、あらゆる認識は究極的には直観に基づくとされる。時間的空間的に現実存在する個物を把握する経験的直観に対し、その個体の本質を把握する直観が本質直観と呼ばれ、両者は別種の直観である。フッサール現象学において事実以上に本質を認識することが重要視されるのは、経験的直観によって把握される事実や自然法則にもとづく事実学に対し、フッサールは本質直観によって見いだされる本質とその必然的連関にもとづく本質学の構想を目指していたことに起因する。本質学は事実学に先行し、事実学を規定するものとみなされる。つまり、本質学は、認識の可能性を解明し事実学を基礎づける役目があると考えられているのである。したがって、フッサールの現象学において事実的世界の最終的な解明は本質学の領域でなされるということになる。

本質直観に対するフッサールの取り組みは、『論理学研究』の第6研究に端を発する。そこでは、感性的直観を基礎としてそれに対応するスペチエスを直観するイデー化抽象について論じられている。さらに純粋意識の絶対性を唱える観念論的立場とされる『イデー』においても、第1巻第1篇で本質論が主題的に展開された。イデー第1巻において本質を直観する方法は形相的還元と呼ばれていたが、フッサールの後期現象学においては自由変更という名称が用いられるようになる。本発表では、以上の展開すべてを詳細に検討することはできないが、後期フッサールの自由変更の理論に的を絞り、必要に応じてそれ以前の本質直観についてのフッサールの論述、特に事実制約されない自由な想像力が強調されるようになった『イデー』以降の論述を参照する。

『経験と判断』第3編87節にもとづき、自由変更について概略を述べるならば、次のようになる。自由変更は3つの段階の手続きから構成される。それは、(1)想像のうちに対象を自由に変容させ、(2)多数の変容させたものが重なり合い、統一的に結

合し、(3)同一なものを能動的に取り出すことである。例えば、「イス」の本質を直観するために、まず(1)可能なイスのあり方を自由に想像しみることから始まる。様々な素材や色のイス、足の長いものや短いもの、足の本数が異なるものや様々な背もたれの形状のイスを思い浮かべてみる。次いで、(2)様々な想像されたイスが重層的に重なり合うことで、最終的に(3)重なり合いによって見いだされる差異から共通する一般的なイスが取り出される。つまり、重なり合いによって、想像された諸々のイスの偶然的特性と不変であるところの本質的特性との区別がもたらされる。以上のプロセスにおいて、対象の偶然性が除去されることが重要とされる。しかし、以上のような方法論に対して、様々な疑問が提起されてきた。本質は一度に把握されるのではなく、想像の助けをかりることで様々な想像的对象を巡ることで、事実的な偶然性から切り離された後に把握される。そうであるならば、それは触発してくる対象の同時的な統一による多数的对象とはどのように区別されるのか。また、現実眼前にある対象であれ、想像上の対象であれ、それを「見本」とし、無限に多様な対象が算出されることが考えられているというのであれば、それによって純粹普遍性が見出さるという想定は素直に受け入れられるものではないだろう。このように自由変更に対しては、他にも多くの異議が申し立てられている。本発表では、Lohmarなどの先行研究を参照し、事実的認識の方法論と比較することで、自由変更が孕む問題を検討する。

文献

Levin, David. 1968. "Induction and Husserl's Theory of Eidetic Variation," *Philosophy and Phenomenological Research* 29(1), 1968, pp.1-15.

Lohmar, Dieter. "Die phänomenologische Methode der Wesensschau und ihre Präzisierung als eidetische Variation," *Phänomenologische Forschungen*, 2005, pp. 65-91.

Sowa, Rochus. "Wesen und Wesensgesetze in der deskriptiven Eidetik Edmund Husserls,"

Phänomenologische Forschungen, 2007, pp. 5-37

橋詰史晶 「本質はどのように獲得されるか——自由変更における事実の乗り越えの可能性について」、『フッサール研究』(10)、2013年、pp. 43-60。

松井隆明 「フッサールにおける本質認識とそのアプリオリ性」、『哲学』(68)、2017年、pp.185-199。